

佃のわたし

長谷川時雨

青空文庫

やみ よふけ
 暗の夜更にひとりかへる渡し船、
 残月ざんげつのあしたに渡る夏の朝、雪の日、暴風雨あらしの日、
 おもむき
 風趣はあつてもはなしはない。
 なみひ
 平日の並のはなしのひとつふたつが、手帳のはしに
 残つてゐる。

一日のはげしい労働につかれて、機械が吐くやうな、重つくるしい煙りが、石川島いしかはじまの
 工場の煙突から立昇つてゐる。佃つくだから出た渡し船わたしぶねには、職工しよくこうが多く乗つてゐる。築
 地はうの方から出たのには、佃島つくだへかへる魚賣りが多い。よぼよぼしたお爺さんの蜆賣りしぐみうと、
 十二三の腕白が隣りあつて、笹と笹をならべ、天秤棒を組あはせてゐたが、お爺さんが小
 僧の、不正な枿こすを見つけたのがはじまりで、

こんな狡いこすことをしてゐる、よく花客とくが知らずにゐるな、と言つた。

俺は山盛りに賣るからよ、爺さんぢいはどうする、と小僧は面白さうにきいた。

俺か、俺は枿これに一ぱいならして賣るのよ。

へん、客がよろこぶめい。賣れるか。

賣れねえ。

乗りあひの者は一時に笑つた、例の通り船頭が口をだした。

小僧、三十錢から賣つたつて、家へは二十錢も、もつてけへるめい、なあよ。

それはいけねえ。家で母親が當にしてゐるのだから、ちやんと持つてかへつて、二錢でも三錢でも氣もちよくもらへ、と、おぢいさんは首をふつた。

十五錢もありや母親は好いのよ。十錢買喰ひをしても、よけいに取れるから割が好いやな、と、も一人の船頭が言つた。

二錢ばかりの小遣なら、爺さんのやうに十錢も稼いでおかあ、なあよ。

違ひない、と皆はまた笑つた。小僧は箆に残つてゐたすこしばかりの蜆を、河の中へ底を叩いてあけてしまつた。お爺さんは掌に河水をすくつて、箆の底に乾ききつてゐる貝へかけてゐる。傍の若い者が調戲つて、

爺さんなよく毎日残つてゐるな、もう腐つてゐるだらう。河の中へ歸しておけよ、勿體ねえぢや困るぜ、と

鰯がはいつて來たな、と沖からはいつて來る漁船を見て、一人が言つた。

兄い、寺は何處だい、御苦勞だな、と棹をいれながら、船頭が挨拶をした。

寺つて言へばよ、をかしいことがあるのよ、坊主なんて辛いことをするぜ、尤も俺達も
 亂暴にや違ひないが、去年よ小石川の寺院てらでよ、初さんところの葬式の來るのが遅れたの
 でな、前さきへ行つてゐた者が、一盃いっぺいやり始めたのよ、すると誰かが外で、其處いらには珍めづ
 らしい新らしい鰯のを、見つけたといつて買つて來たのよ、買つてくる奴も奴ぢやねえか、
 一盃機嫌だから、御本堂も何もあるものか、よからうと言ふので焼出したのよ、すると和
 尚め、よい匂ひですな、なんてやつて來やがつて、旨い漬物を出してよ、よろしければお
 かはりをなさいましと來たのだ、どうです和尚おしやうさん御一緒ごいっしょになつては、と言ふとな、
 結構ですと言やがるんだ、厭になつちまふぢやねえか、其處ですつかり仲間になつてやつ
 てしまふとな、佛を持つて來たのだらう、すると皆みんなが妙だ。妙だ、變な匂ひがするつて、
 ヘツ、する筈だあな、線香で鰯の匂ひを消さうと思やがつて、和尚おしやうが燻いぶしたてるんだ、
 たまらねえ。

呆れてしまふな、何宗だい。

何宗だか、俺われの家の寺ぢやねえもの知らねえや。

親鸞しんらんさま様は矢ツ張り豪えらいな。

さうともよ、末世まつせを見通しなされたのだ、あれほどのお方で妻帯をなすつたのは、御自

分の豪い^{えら}のを知つて、後の坊主^{のち}どもが、とてもそんな堅^えつくるしくしてゐられめえと、わざと御自分がみんなの爲に、あなすつたのだとよ、豪い^{えれ}な、眼があるのだ、有難い話ぢやねえか。

あしたの紅顔^{こうがん}夕べに白骨^{はつこつ}となる、ほんとだ、まつたくだ、南無阿彌陀佛と言ひたくならあな。

お前の家は何宗だつけな。

本願寺だ。

——當りますよ、大當り、と船頭は聲を張あげた。

雨の日に、年をとつた労働者が二三人、寒さうに顫へながら、小さな聲でこんな咄^{はな}しをしてゐた。

金華山て何處だらう。

さうさな、ありや美濃だらう。

さうか、そこいな、大きな鯨が出て、大砲の彈丸を三發もうけたが、とうとう船に四^{よつた}人乗せたまま吞んでしまつたとよ。

はなしだらう。

さうでないのだ、信實まつたくだとよ、新聞にあつたのだらう。

船と人が四人？ そんなに呑めるものかな。

呑めるんだらう、何しろ巨でかい鯨ものに違ひない。

でも美濃は山國だらう。

さうかな、ちつとをかしいな。

山國にしておけよ、俺の家の息やつが、なんでも船乗りになつてゐるさうだ。

さうか、知らなかつた——ろくなことはないなあ。

好いことはきかせねいや。

伊豆通ひの漚船ふねが、漚笛きてきを低く呻吟うならせて通り過ぎると、その餘波にゆられて、ゆらゆ

らしながら、

金華山は美濃だ、美濃はたしかに山國だ。

さうならお咄はなしだ。と言捨てて共に去つた。

明治四十年ぐらゐの京橋區佃島の住吉の渡しでの乗合衆である。

青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年2月10日発行

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2009年1月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

佃のわたし

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>